

『阿弥陀過度人道經』

——經題とその思想——

吳・支謙訳とされる『仏説阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』は、所謂（無量壽經）の最古訳と考えられる浄土經典である。この經題は、音写語「阿弥陀・三耶三仏・薩樓仏檀」と、訳者による付加語と看做される「過度人道」との部分より構成されている。本稿の主目的は、「過度人道」なる語がもつ中国宗教思想史上における意義を探る点にある。しかし音写語、特に「薩樓仏檀」は文献学的にも、原語に関しても問題がありながら、従来等閑視されているため、先ずそれに関する問題を提示しておく。

阿弥陀・三耶三仏・薩樓仏檀——「阿弥陀」の対応原語に關しては未だに確定されていないが、今は藤田宏達『原始淨土思想の研究』に従い *Amiṭābha* 「無量の光明」、「三耶三仏」は *saṃyak-sambuddha* 「正等覺者」と比定しておく。さて「薩樓仏檀」の原語は、結論から言えば未詳であるが、次の点を指摘しておく。第一に「薩樓仏檀」とするのは高麗藏

本の上巻首題のみであること。『出三藏記集』を始め、『大唐内典錄』『開元釈教錄』などの諸經錄は、經題をフル・ネームで記す場合、この部分はいずれも「薩樓檀」とし、「仏」を加えない。いかなる理由で高麗藏本に「仏」字が加わったのかは未詳で、また、それにしても原語が推定することもないため、「薩樓檀」が正しいとも速断できない。また第二に、この音写語の原音価を推定するために、本經中の音写語にあらわれるこれらの各字を調べた結果、特に「樓」字は次のような特徴を示す。

樓。夷亘羅——*Lokeśva*

蓋樓。亘——*Avalokiteśvara*

樓。波黎波——*Lokapradīpa*

「樓」は上古音韻系音価は *lɔg* で標記され（董同龢『上古音韻表稿』）、丁度、右の用例に対応していることを示す。因に附言しておけば、例えばこの「樓」は切韻・広韻等の中古音韻

丘 山 新

系音価では入声語末子音を失い、*pen* に変化する (B. Karlgren; *Grammata Serica Recenset*)。このような入声語尾 *-p, -t, -k* の消滅からみた上古音系より中古音系への移行は、地域差はあるが、例えば五世紀初めの鳩摩羅什訳では「樓」は中古音系音価で使用されるように、三世紀末より四世紀中葉にかけて生じたもの、と私は推定している。この現象は従来注目されていなかったが、鳩摩羅什時代に至るまでの訳注の問題を採る際に、ひとつの手懸りとなろうし、逆に仏典の音写語はこの時代の中国音韻研究にも重要な資料となろう。いずれにせよ、これらのことを含め、「薩樓檀／薩樓仏檀」の対応原語については、今後の研究に俟つ。

なお、この音写語部分はその後の中国人にも不可解であつたらしく、宋・王日休『仏説大阿弥陀経』序には「阿弥陀過度人道経」なる呼称があらわれる。

過度人道——経題のこの部分は、本稿の後の論証から強く推論されるように訳者によって附加されたものであり、且つそれは、本経が当時の中国宗教思想世界にあらわれつつあった救済思想に呼応して受容されたことを象徴し、暗示するものである。

まず、「過度」の用例を総挙しておく。

- (1) 仏言、阿難、今諸天・世間帝王・人民及蜎飛・蠕動之類、汝皆度脱之。仏言、仏威神甚重、難当也。汝所問者甚深。汝乃慈

心、仏所哀諸天・帝王・人民若比丘僧・比丘尼・優婆塞・優婆夷。大善。当爾皆過度之。(大正蔵十二卷、三〇〇中)

- (2) (阿弥陀仏) 於世間教授、意欲過度。八方上下諸無央数仏国諸天・人民及蜎飛・蠕動之類、欲使往生其国、悉令得泥洹之道。

阿弥陀仏所度脱。(同、三〇八下)

- (3) 在他方異仏国、教授八方上下無央数諸天・人民及蜎飛・蠕動之類、莫不得過度・解脱。憂苦(同、三〇一上)

- (4) 過度・解脱、能升入泥洹(同、三二一下)

- (5) (阿弥陀仏) 我哀若曹子、欲度脱之。……皆得明慧、心悉開解、莫不得過度・解脱憂苦者。……仏皆慈哀、悉度脱之。(同、三二六中)

(1)、(2)の用法は「渡し済う、救済する」、(3)、(4)、(5)の用法は「渡る、超越する」の意。換言すれば、前者では主体は阿弥陀仏等であり衆生はその救済の対象、後者では主体は一、応衆生である。なお、後述するが、「過度」「過」「度」を他動詞のごとく「済う、救済する」の意味で使い始めるのは後漢時代、もしくは初期漢訳仏典(即ち本経)からであろう。逆にいえば、後に結論づけるように、この言葉の意味の変化から、当時の時代思潮、人びとの願いを読みとれるのである。

ところで、用例(1)、(2)、(5)にあらわれる「度脱」は、いずれも「救済する」の意で、「過度」とまったく同じ意味をあらわしている。このことは、本経の異訳經典である『平等覺経』が「度脱」を「過度」と置きかえていることからより

『阿弥陀過度人道經』(丘 山)

明らかである(本經「聞知者莫不度脱也」三〇三上、覺經「聞知者莫不過度者」二八二中)。

ところでさらに本經で、「救済する」もしくは「超越する」の意をあらわす語としては、「解脱」「度出」「超絶」「度世」などがある。そこで試みにこれらの語が、本經全体の中にどのように分布しているか、つまり、翻訳に際して中国で附加されたと考えられる所謂「五惡段」とその他の部分とでどのように分布しているかを調べよう。

全體 五惡段 割合(%)	過度	度脱	解脱	度出	超絶	度世
40 %	2	5	23	1	1	9
65 %		15	10			9
75 %				1	1	
100 %						
100 %						
100 %						

そして、五惡段が本經の30%の割合を占めていることと考えあわせると、これら一群の語彙が五惡段にあらわれる割合は異常に高いといわざるうえない。また、五惡段以外の部分においても、これら諸語彙に対応する原語は、少なくとも現存梵本の対応箇所には見出しえない。これらの事実が意味することは重大である。麦谷邦夫「初期道教における救済思想」(『東洋文化』五七号、一九七七年三月)が明示したごとく、中国において他者救済を明確に志向する宗教的救済思想が出現してくるのは紀元二世紀後半まで待たなければならなかった、

という事実と呼応するわけである。即ち、このような当時の中国の時代思潮を背景に、それらを担ったかたちでこれら「過度」などという諸語彙が訳者によって附加されたということである。それ故に、自由に語彙を使いうる五惡段にこそこれらの特徴語がより多く出現したのであろう。ところで本經をはじめ、いわゆる無量寿經經典類は、同じく大乘經典とはいいながら、絶対者によるわれわれ衆生の救済を説く点で、他の大乘經典類とはその本質的構造を異にしたものである。本来そのような特徴をもった本經典が、まさに救済思想を求めつつあった中国民衆に、そのような中国宗教世界に受容され、そうであればこそ、翻訳の際にもこれほどに多くの救済をあらわす語が附加されたのである。そしてそれらの状況をふまえた上で、経題にも「過度人道」なる語が加上されたのだ、と断定できるのである。また、本經典が翻訳された後、この救済思想が「(過)度人(道)」という語に典型的に示されつつ、多くの道教經典に影響を与え、受容されていったことも後述するとおりである。

次に「人道」の用例を総て挙げてみよう。

- (1) 第十九願、使某作仏時、八方・上下無央數仏国諸天・人民・蜎飛・蠕動之類、皆令得人道、悉作辟支仏・阿羅漢(同、三〇二上、また三〇八下にもほぼ同文)
- (2) 復令他方面各千須弥山仏国中諸天・人民・蜎飛・蠕動之類、

皆復使人道。悉令作辟支仏・阿羅漢（同、三〇九上）

残念ながら、本経には、「過度人道」「度脱人道」のような用例はない。そのため、文脈なしに経題の「過度人道」なる語を解釈すると、(1)「人びとを救済する」という意味のほか、(2)「人間世界を超越する」という意味にもとれそうである。そこでまず、仏教伝来以前の中国古典における「人道」の用例、用法を調べてみよう。

『礼記』喪服小記「親親、尊尊、長長、男女之有別、人道之大者也」

この用例は、社会の道德・規範、人倫、すなわち人として歩むべき道の意味し、他の用例も多い。しかし、本経とは直接の関わりはない。

『莊子』天道篇「夫天地至神、而有尊卑先後之序、而況人道乎。」

宗廟尚親、朝廷尚尊、鄉党尚齒、行事尚賢、大道之序也」

『易』謙卦「天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙、鬼神害盈而福謙、人道惡盈而好謙」

これらはいずれも人間世界を意味するものである。これらの用例に従えば本経の「人道」も「人間世界」と解釈すべきであろう。また確かに本経の用例も「人間としての在り方」と解釈するのが、文脈上も最も自然である。従って、中国古典の用例、及び本経の用例に由る限り、「過度人道」は「人間世界、人間としての在り方を超越する」の意で解釈する可能

『阿弥陀過度人道経』（丘 山）

性もあるが、先に見た「過度」「度脱」の他者救済的な用法、さらに本経の趣旨——即ち阿弥陀仏による衆生救済——

を考慮すれば、やはり「人間世界を救済する」、しいては「人びとを救済する」の意で解釈の方がより相応しいといえよう。そしてこの語は、この後「度人」として定められ、麦谷前掲論文の指摘するごとく中国宗教思想の流れのなかで救済思想をあらわす典型的な根源語となつてゆく。また、もし本経の訳者が支謙だとすると、彼の訳になる『維摩詰経』にあらわれる「度衆生」（五回）、「度人」（二回）、「度斯下劣人」

「度諸衆生」「度諸世間」（各一回）、「度脱衆生」（二回）、「度脱一切衆生」「度脱無數衆」（各一回）などの救済思想を示す語と相俟って、中国宗教思想史上に与えた本経の影響は測り知れぬほどであったといえよう。なお、道教側で「度人」なる語があらわれるのは、『元始無量度人上品妙経』など宋より齊にかけて成立したと考えられる経典からであるという。なおさらに、江南地方の古来の宗教的伝統において、上清経典類から靈宝経典類へと展開してゆくなかで、本経典が果たした役わりもまた注目されよう（Stephen R. Bokenkamp: Sources of the Ling-pao Scriptures——Taoist and Taoist Studies in honour of R. A. Stein. 1983）。特に後者の問題は、本経が江南の呉地方で翻訳・成立したことを逆に暗示するもの、即ち支謙訳であることを暗示するものとして興味がある。（日本大学講師）